



城

特許審査第二部生産機械 山本 忠博

第二十七回 がっさんとだじょう 月山富田城(その1)

～西の下克上はここから始まった～

戦国時代がいつから始まったのかという問いの答えはいくつかありますが、その一つとして、東で北条早雲が、西であまこつねひさ尼子経久が下克上を起こした時期とするものがあります。二人の話は、後世の脚色が加わっていてそのまま史実としてはとらえられませんが、戦国の幕開けらしい面白い話が伝わっています。今回は、その二人のうちから尼子経久をとりあげて、彼と関係の深いがっさんとだじょう月山富田城(現島根県安来市)についてご紹介しましょう。

ただ、この城については、経久の死後にも関係する人物と取りあげるべき話が多いので、「尼子氏の興隆」と「尼子氏の滅亡」という二つの観点から、今回と次々回の二回にわたって書き進めることにします。

出雲守護の居城

この城の歴史は古く、鎌倉時代には出雲(現島根県)の守護の居城として存在したとされます。出雲の守護は、鎌倉時代に宇多源氏の名流である佐々木氏が務め、その後、南北朝時代の一時期に他家にとって変わられますが、室町時代には再び佐々木氏の流れをくむ京極氏が務めていました。京極氏は当時の有力守護の倣いとして出雲には赴かず、守護代を派遣しており、その守護代を務めたのが京極氏の支族に当たる尼子氏でした。

尼子経久の登場

1400年代の後半に尼子家から経久が登場し、20歳の頃に家督を継いで出雲守護代に就きました。経久は次第に力を蓄え、ついには主家の京極氏と室町幕府からの命令を無視して税金の上納を怠りました。しかし、このときは事を起こすには時期尚早だったようで、出雲の他の国人領主(在地の武士層)の反感も買い、文明16年(1484年)に京極氏と幕府の命でこれら国人領主に城を囲まれ、経久は守護代の地位を追われてしまいます。その後の彼の行動は実はよ

くわかっていませんが、江戸時代の軍記物では次のように伝えています。

城を追われた経久は、諸国流浪の末に出雲に舞い戻り、かつての家臣に連絡をつけ、さらに祭礼時に舞を披露する芸能集団と連絡をとりました。彼は月山富田城の奪還を企み、文明18年(1486年)の正月に、芸能集団の新年の祝いの舞いに紛れて月山富田城に侵入し、数十人の家臣とともに城兵の隙をついて城の奪取に成功した、という次第です。

下剋上だったのか

さて、軍記物に書かれたような事柄あったかどうかはかなり怪しいところで、実際は、守護代を追い落とされた後も出雲国内で一定の力を維持し続け、その力によって権力の第一線に返り咲いたと推測されます。また、主家の京極氏を追放した形跡はなく、この時期に出雲に下向していた京極家の主と上手くやっていたようで、おそらく京極家の権威を背景に周辺の国人領主を圧迫したのでしょう。こうした点からみると、彼は下剋上ではありません。

ただ、永正5年(1508年)に京極家の主が亡くなる折に、経久は京極家の幼い後継者の後見を依頼されるのですが、その後継者はほどなく歴史の舞台から消え、結果として彼が事実上の出雲の主になっています。平和裏に権利委譲がなされたのかもしれませんが、守護代が守護に取って代わったのですから、下剋上といわれても仕方ありません。

経久の人となり

ある書物では、彼のことを「天性無欲正直の人」と評しています。とにかく気前の良い人で、着ているものをすぐに家臣に与えてしまうので、冬でも小袖一枚でいたといいます。また、所持品を褒められると、それを褒めた者に与えようとするので、家臣が褒めるのを控えたといいます。

ある家臣が、さすがに庭の松の木は大丈夫だろうと思ってその枝ぶりを褒めたところ、その松が大量の薪になってその家臣の家に送られてきたそうです(これはやりすぎ…)。

ただ、これらの話も、穿った見方をすると、当時の大名の置かれた立場がよくわかります。この時期の大名は、他よりちょっと勢力の強い国人領主といった方が的確で、家臣にあたる他の国人領主と大した実力差はないわけです。その家臣たちをまとめるには、領地獲得という共通の目標を掲げて外に目を向けさせ、対外戦争を通して利益を誘導し、かつ公平に分け与えなくてはなりません。これができないとすぐに離反されるか、謀反を起こされます。つまり、家臣に気前良く利益を与え続けないと自分の身が危ないわけです。

尼子氏の拡張と挫折、そして経久の死

出雲の支配者である経久は、山陰から山陽にまで勢力を伸ばしていきました。中国地方は、古くから周防(現山口県)の大内氏が勢力を張っていましたから、必然的にこの大内氏との二強対決の様相を呈することになります。中国地方の国人領主たちは、尼子氏に付くのか大内氏に付くのかで、右往左往することになりました。見方を変えと、国人領主たちの動きは流動的で、尼子氏の配下にいた国人領主も、けっして純粋な家臣として従っていたわけではないのです。そんな国人領主たちの中で、後に名を上げるのが、安芸(現広島県)の毛利元就もうりもとよりで、彼は一時的に経久の配下として働きますが、尼子氏が毛利家の後継問題に介入したことを契機に手切れとなり、大内氏の下に走ります。



諸勢力の位置

元就が配下に付いていた頃が経久の絶頂期で、「陰陽11州の太守」とまで呼ばれますが(実際は11ヶ国も領していないが)、元就の離反後は身内の反乱にあうなど苦しい戦いがあり、晩年を迎えて家督を孫あきひこの詮久に譲ります。時に

天文6年(1537年)のことでした。

その詮久が毛利元就を討伐すべく、3万もの兵をあげたのが天文9年(1540年)ですが、毛利方の持久戦と大内軍の援軍によって、詮久がまさかの敗北を喫します。そして、尼子家の勢力が減退するなか、翌年の天文10年(1541年)に経久は死去しました。享年84(諸説あり)。この経久の死によって、尼子氏配下の国人領主が数多く大内氏に寝返り、尼子氏は窮地に立たされることとなります。

第一次月山富田城の戦い

尼子氏の勢力が後退したため、この機に尼子を討つべしとの機運が大内方に起こるのは当然のことでした。そして、天文11年(1542年)に、大内氏は出雲に兵を向けます。これに毛利元就や尼子方から寝返った国人領主たちも合流し、総勢2万になりました。この年は、周辺諸城を攻略することに費やされたため、月山富田城の攻略戦が開始されたのは天文12年のことです。

しかし、月山富田城は難攻不落の要害で、天空の城とも呼ばれる堅城ですから、城攻めは難航します。尼子方にゲリラ戦で延びきった兵站線を叩かれ、さらには尼子方から寝返っていた国人領主たちが再び尼子方へ寝返ったため、大内軍は動揺して撤退を開始します。この撤退戦は凄惨を極め、大内家の後継ぎは事故死し、毛利軍は壊滅的な打撃を被り、元就も自害を覚悟するまでに追い込まれながら家臣の身代わりでようやく自領にたどり着きました。

戦いの後

この戦いの結果、斜陽の尼子氏は息を吹き返し、晴久はるひさと改名していた詮久によって、失地の回復とさらなる勢力拡大がなされました。天文21年(1552年)には、晴久が室町幕府から山陰山陽8ヶ国の守護に任ぜられ、経久時代に勝るとも劣らない尼子氏の最盛期が訪れることになります。

一方、さんざんな敗北を味わい、後継ぎも失った大内家の主は、完全に軍事に関する興味を失い、文化方面に傾倒し始めます。その結果、家臣の謀反にあい、戦国大名としての大内家は実質的に滅亡してしまいます。この後、この謀反を起こした家臣を滅ぼして、まずは中国地方の西側を制するのが前出の毛利元就であり、この元就が、中国地方の東を制する尼子家と対峙していくこととなります。

と、ということで、今回はここまでにしましょう。次々回は、経久と並び称される謀の達人である毛利元就(ちなみに、経久を「謀聖」、元就を「謀神」と呼んだりします)の月山富田城攻め(第二次月山富田城の戦い)の辺りから話を始めることにします。